

能登路雅子先生をお送りする

遠藤 泰生

能登路雅子先生は細やかな気遣いと思切りの良い判断力とを併せ持つ、駒場の教員の中でもひとときわ輝く存在である。アメリカ科の助手をされていた頃から、公私さまじまの問題を抱える学生に懇切丁寧な指導を行うかたわら、研究論文を仕上げるためには助手室で徹夜もいとわない、エネルギッシュな先生として名を馳せておられた。学部のアメリカ科を卒業した後、外資系の広告会社マッキンエリクソン博報堂にいったん就職し、営業を担当、その後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校で文化人類学・エスニックスタディーズを修め、学術の世界に入るという、今でこそ珍しくもなくなった、ビジネスとアカデミアの両方の世界で経験を積まれてきた方である。地域文化研究専攻の教員として駒場に赴任するのが偶然ではあるが先生より少し早かった私は、この輝く先輩を眩しい思いでお迎えしたのを覚えている。その後も、「困ったときには能登路先生」と眩きながら、アメリカ太平洋地域研究センターの運営、大学院地域文化研究専攻の学生指導、そしてアメリカ科の運営と、すっかり頼りっぱなしのまま今日までお付き合いをいただいている。その先生がもう定年退職の年を迎えられるという。頼れる先輩を失う現実にまごついているというのが、正直な思いである。お茶目な発言で周囲を沸かす先生の話がキャンパスで聞けなくなるかと思うと、さらに寂しさがつのる。

能登路先生の研究は、ビジネスとアカデミアの両方の世界を生きてこられた方ならではのもの、と言えるのではないだろうか。アカデミックな世界でしか通用しない専門用語にまみれた学術など、おそらく、能登路先生の興味の範疇にない。政治外交から建築、音楽、映画、料理に至るまで、世の中で起きている万事に興味を抱く旺盛な好奇心に支えられた先生の学術は、大学外の人たちとのコミュニケーションにも周到な目配りをきかした、教養学科の学芸の一つの好例だと私は思う。主著である『ディズニーランドという聖地』（岩波新書、1990）は、刊行されて四半世紀近くを経ているにもかかわらず、視点の鋭さと文章の切れ味で、類書の追随をいまだに許さない。シカゴ万国博覧会（1893）に関する幾多の論考も、万博関係の研究の中で揺るぎない位置を占め続けている。これらのトピックに関し、学外からの講演の要請がひきもきらないのもうなずける。その二つに大学院生時代以来関心を持たれている日系アメリカ人研究を加えると、能登路先生のアメリカ学の輪郭が見えてくる。それは、高邁な思想に縁取られた理念的なアメリカだけを極めるというよりは、日々の生活のなかで人々の肌に触れる具象的、実在的なア

アメリカを探求するものであり、しかしそれでいて、組織と個人の確執や近代と伝統の相克など、現代世界が抱える問題や可能性に果敢に切り込む、きわめて普遍的なものもある。地域文化研究の世界には、教え子はその学風を受け継ぎ切れない個性豊かな学風を築かれる先生が少なからずいらっしゃるが、能登路先生も、要するに、そうした学風をお持ちの方だと思う。先生の研究に憧れて例えば大衆文化の研究を志しはしたものの、知性と感性の両面において先生に遠く及ばぬままその上っ面だけ真似て、逆に先生の大きさを学び直す羽目に陥る学生も多かったのではないだろうか。能登路先生は、それだけ奥行き深い柔らかな思考をめぐらすことがおできになる先生なのである。一人でアメリカ学を全てやってしまう、そんな先生だと言い換えてもよい。「余人をもって代え難い」というのが職場を去る先輩を讃える決まり文句の一つだが、能登路先生の代わりをつとめられる人は、本当にいない。

能登路先生は、教育者として限りなくお優しい先生でもある。学生指導、なかでも「むつかしい」テーマを掲げた論文を書く者の指導において、能登路先生の力にどれだけ自分たちが着てきたか、同僚ならば誰でも思い当たる節があるに違いない。上にも記した研究における先生の守備範囲を思い起こせば、それはすぐに合点がゆく。しかし、私が何より尊敬するのは、生徒の資質の如何にかかわらず、教師としての自分とその生徒との出会いを真摯に受けとめ、いかなる学生に対しても分け隔てない態度で指導を続ける先生のお姿である。戦前の旧制弘前高校（戦後の弘前大学）でお父様が教えておられた能登路先生は、教育者の家庭で育った教育界のサラブレッドでいらっしゃるのだが、それにしても、私だったらとうに匙を投げていそうな「むつかしい」学生を幾人も指導されながら、その学生を叱咤激励するのをむしろ楽しんでおられる様子は、教育者としての先生の器の大きさを示して見事というほかない。実際、その先生の大きさに惹かれて指導を仰いだ学生数は多い。能登路アメリカ学の一端を受け継いで、大きく花を咲かせる者がその中からやがては出てこよう。それを先生は楽しみにしておられるに違いない。

能登路先生と言えば、もう一つ、やはり英語である。先生は英語の達人である。ミシガン大学やコロンビア大学での客員教授のお仕事はひろく知られるところだが、『東大英単』（東大出版会、2009）の事実上の監修者でいらしたことはあまり広く知られていない。AFS（American Field Service）の留学生として高校時代に一年間アメリカで過ごされた経験が大きかったと先生は自嘲気味によくお話しになるが、もともとあった語学の才能無くして、あそこまで自由に英語を使いこなすことはできない。そもそも「現場」に強い臨機応変の方であるうえに「英語」運用が抜群でいらっしゃるから、フルブライト（FULBRIGHT：日米教育委員会）やカルコン（CULCON：日米文化教育交流会議）等さまざまな組織でたいへんな活躍をされてきた。学と官の世界を結ぶそれらの業績は業績表その他には大きく現れないかもしれないが、特筆に価する。2012年10月からスタートした

大学院・国際人材養成プログラム（GSP: Global Society Program）の運営委員長として、退職間際まで忙しく働いていらっしゃる姿を我々は日々目にしているが、そんなものは今まで先生が積み重ねてきた教育の国際化という大きな業績の、ほんの一部でしかない。アメリカ学会の国際化に果たされた役割など、これから若手が引き継がねばならない仕事は数限りないのである。

退職をされた後は、長いこと温めてきた「遊び」に視点をおいた日米文化交流研究をおまとめになると聞いている。駒場で様々の仕事に追われ、考え抜けなかった面白い問題を、大胆な著作にまとめてくださるのを私たちも心待ちにしている。そして、その著作を手にしたとき、私たちはあらためてこう思うに違いない。「能登路先生の代わりをつとめられる人は、いるわけがない」と。最後に、研究、教育、行政における先生の長年の貢献に重ねて感謝申し上げたい。そして、アメリカ研究の若手を長い間ご指導いただきありがとうございました。